

「未解決の問題が与える影響」

創世記4章1節—17節

私達は二週間前に最初の人、アダムとエバを見てまいりました。彼らは神が備えたもう完ぺきな環境の中に暮らしておりました。しかし、その完ぺきな環境の中で彼らは問題を生みました。彼らは食べてはならない禁じられた実を食べたのです。私達は確認しました、そう、問題は最高の環境でも起きるということを。

彼らは「その問題の原因は神だ、エバだ、蛇だ」と主張しました。しかし、それは誤っておりました。彼らの問題の原因は彼ら自身の心にありました。しかし、彼らはその問題の原因と向き合うことなく、「恥」と「恐れ」と共に園を追われて出ていきました。

聖書はあの禁じられた実を食べてしまった時から彼らにともなうこととして、女性は苦しんで子を産むようになるということ、また人は汗を流して苦労して労働をしなければならないこと、その労働は時に報われずに徒労となることがあるということ、またそれ以来、誰も人は死ななければならないという宿命を負ったと記しています。言うまでもなく、これらのことは全て私達が今日、背負っていることなのです。

アダムとエバはこのようにして、これらのものを背負い、エデンを追われて出ていきました。以降、彼らにはどんなことが起きたのでしょうか。今日の聖書箇所を見てまいりましょう。

1 人はその妻エバを知った。彼女はみごもり、カインを産んで言った、「わたしは主によって、ひとりの人を得た」。2 彼女はまた、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。3 日がたって、カインは地の産物を持ってきて、主に供え物とした。4 アベルもまた、その群れのういごと肥えたものを持ってきた。主はアベルとその供え物とを顧みられた。5 しかしカインとその供え物とは顧みられなかったので、カインは大いに憤って、顔を伏せた。6 そこで主はカインに言われた、「なぜあなたは憤るのですか、なぜ顔を伏せるのですか。7 正しい事をしているのでしたら、顔をあげたらよいでしょう。もし正しい事をしていないのでしたら、罪が門口に待ち伏せています。

それはあなたを慕い求めますが、あなたはそれを治めなければなりません」。8カインは弟アベルに言った、「さあ、野原へ行こう」。彼らが野にいたとき、カインは弟アベルに立ちかかって、これを殺した。9主はカインに言われた、「弟アベルは、どこにいますか」。カインは答えた、「知りません。わたしが弟の番人でしょうか」。10主は言われた、「あなたは何をしたのです。あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいます。11今あなたはのろわれてこの土地を離れなければなりません。この土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたからです。12あなたが土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません。あなたは地上の放浪者となるでしょう」(創世記4章1節-12節)。

アダムとエバは人類最初の人であり、同時に人類最初の男と女であり、また彼らは人類最初の父となり、母となりました。そうです、彼らには二人の息子が与えられたのです。創世記はこのように初めの人間、初めの夫婦、初めの親子というような私達の世界の原型について記しています。ここから家族、親族が生まれ、やがてそれは民族となり、国家となって今日にいたっているのです。その様が聖書には書かれているのです。そのような意味でまさしく今日の世界の原型、オリジナルが創世記には記されています。

私達の世界には色々な問題があります。否、そんな悠長なことを言っている場合ではなく、問題は私達のすぐ身近なところにたくさんあります。その問題の多くは人と人との間に生じる問題です。そうです、先々週もお話ししましたようにその問題に取り組むためには、その問題の原因を見極めなければなりません。そして、その見極めに対して多くの助けとなることが、私達人間のオリジナルの姿に私達が今日、彼らと共通する問題の原因を見出すことです。

この個所において、聖書は人類最初の男と女から産まれる最初の子供達について触れています。1人はその妻エバを知った。彼女はみごもり、カインを産んで言った、「わたしは主によって、ひとりの人を得た」この個所で「わたしは主によって、ひとりの人を得た」という言葉はエバによって言われたことがわかります。

その子には「カイン」という名がつけられました。その名前の由来は「わたしは主によって、ひとりの人を得た！！」というエバの言葉の「人」という意味がありました。さらにはこのカインの父、「アダム」という言葉もヘブライ語で「土」と「人」を意味するものだったのです。

そうです、すなわちエバがアダムの妻として、私は主によって一人の人を得たと言った言葉の背後にはエバが夫アダムに代わる一人の人は私は得たのだというような思いがそこには込められていたのです。

先々週、私達はエバの夫、アダムが自らの潔白を主張し、その問題の原因を妻になすりつけたこととお話ししました。シチュエーションはこうです。全てをご存知である神と妻エバを前にしてアダムは自分がこの実を食べたのは「神よ、あなたが（私が願ってもいないのに）与えたこの女が自分にこの実をくれたからだ」と言いました。その場でこの夫の言葉を聞いていたエバはどんな思いを持ったことでしょうか。皆さんがエバでしたらどう思いますか。このことは明らかにその後のこの夫婦の信頼関係を著しく損ねたに違いないということが想像されます。

問題の原因を自分とするのではなく、それを相手のせいとする、この性質はアダムにもエバにもありましたから、もし彼らがそのところを修正せずに、そのような心を持ち続けて互いに夫婦としてその後の人生を歩んだとしたら、この夫婦の間には未解決の問題が山積みとなったことでしょう。そんな矢先に与えられた長男、カインに対して彼女は思わず、自分に問題の責任を押しつけた夫に代わる人が与えられたのだという喜びの一声をあげたのかもしれませんが。

この二人がどのようにカインを育てたのかは分かりません。しかし、後に次男アベルが生まれた時にはエバの一声もアダムの一声もなく、ただ彼の名前を「アベル」としたという記録だけを創世記は記しており、そのアベルという名前の由来は「息」という意味で、それは「はかないもの」、「虚しいもの」をさす言葉だったということが分かるだけなのです。

それにしても我が子に「虚しい」という名前をつける親はいません。しかし、彼らはそんな名前を二番目の我が子につけました。長男カインが生まれてから、この家族の中に何が起きたのでしょうか。エバはその夫に対する信頼を失い、夫ではない、自分の長男を、あたかも夫のようにして愛したのかもしれませんが。そのことによりこの夫婦の関係がさらに疎遠となっていく、それゆえにもはや二番目の子に対する期待というものが失われてしまっている、そんな夫婦の心をここに読み取るのは私だけでしょうか。

夫婦の原則をお話ししましょう。その原則はとても古いものです。そうです、何を隠そう、その原則はこの人類最初の夫婦、アダムとエバに語られたものでした。そう、彼らが禁断の実を食べる前、アダムの前に初々しいエバが神様に

よって与えられた直後に創世記が記している言葉です。『それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである』(創世記2章24節)。

結婚前のカウンセリングをする時に、私はカップルを前に必ずこの言葉について説明します。お二人が夫婦となったら、できる限り、それぞれの父母から精神的にも経済的にも自立しましょう、そうしなければ必然的に親はお二人の間に入ってきます。父母を離れてあなたたちは一体なのです。ですから夫婦の間にたとえ親であっても入れてはいけません。そして、それよりも、もっと大切なことはお二人に神様が子供を与えてくださるのなら、その子すらもあなたたち夫婦の間に入れてはいけません。聖書は「二人は一体となる」という言葉を夫婦だけに語っており、それは文字通り、その夫婦の間に彼らの親も、我が子も入れてはいけないということなのです。もし、エバが「夫の代わりにこの子が私に与えられた」という思いを持ち、その子が二人の間にあるのなら、彼らは既にこの夫婦の原則を壊してしまったということになるのです。言うまでもなく、このことは子供をないがしろにしるというのではなく、親をないがしろにしるということではなく、夫婦が一体であってはじめてその夫婦も、子供も、親も健全になりうるということの意味しているのです。

おそらく、アダムとエバはこの原則をないがしろにしてしまったのでしょう。原則とは土台ですから、土台が崩れる時に家庭に問題が起こります。そして、そのような矢先に第二子、アベルが生まれる。彼らがその子に「はかなく、むなしい」という名前をつけた理由もうかがい知れるのです。

皆さん、これらのことの始まりは「あの時、私の夫は問題を私になすりつけた」というアダムとエバの間に芽生えた不信感であり、もしあの時にアダムが問題の原因はエバではなく、自分がその実を手にとって食べてしまったことであつたのだということだということをアダムが突き止め、そこから修正がなされていたのなら、このようなことにはならなかったのかもしれませんが。そうです、今日のタイトルですが、このように未解決の問題は後に影響を与えるのです。

彼らの心にある「責任転嫁」はその後、事が起こるたびに度々、顔を出し、ましてや子が与えられるということは夫婦にとって心試されることが必ず増えるということですから、この責任転嫁がアダムとエバの間にもしなされ続けたのであるなら、その影響は家庭にも大きな爪痕を残すことになったでしょう。そして、その最も深刻なことはその父と母の姿を子供たちは見続けながら、成長していったということなのです。

主にある皆さん、このメッセージを作りながら、私は心苦しくなってきました。。なぜなら、この話はあまりにもリアルなのです。どこにでもある話なのです。私達に無関係の話ではないからです。それは他人ごとではない、私達誰もが持ちうる課題だからです。しかし、私達が本当にこのような問題を解決するためには、まずその問題から目をそむけるのではなく、それを直視するところから始めなければなりません。

カインとアベルは成長して、それぞれ自らが従事する仕事をし始めました。カインは土を耕す者となり、アベルは羊を飼う者となりました。きっとこの二人は父母から世界の始まりについて、父と母の出会いについて、食べるなど言われていた実を食べてしまったこと、以来、自分達の労働に苦勞が伴うようになったというような一連のことを聞きながら育ったことでしょう。彼らがそれをどんな思いで聞いたかは分かりませんが、彼らはその心に神の存在というものを抱きながら成長していったことでしょう。

そんな日々の中、父と母が神に供え物をしているのを見て、育ったのでしょう。彼らも各々、そのように神への供え物をするようになりました。彼らはそれを定期的にするようになったのでしょう。定期的に事を継続するということはとても大切なことですが、注意しなければならないことは、そのようなことは徐々に形式的なものへと変わっていくということです。形式的ということはそこに心が伴わなくなるということです。

お話ししましたように長男カインは土を耕す者となりましたから、大地から得る収穫を神に捧げました。次男アベルは羊を飼う者ですから、自ら育てている家畜の中から神に捧げました。その時のことを創世記はこう書いています。

3日がたって、カインは地の産物を持ってきて、主に供え物とした。4 アベルもまた、その群れのういごと肥えたものを持ってきた。主はアベルとその供え物とを顧みられた(創世記4章3節、4節)。

このところには神様が「アベルとその備え物とを顧みられた」と書いています。しかし、カインについては続いてこう書かれています 5 しかしカインとその供え物とは顧みられなかったので、カインは大いに憤って、顔を伏せた(創世記4章5節)。

なぜ、このようなことが起きたのでしょうか。読み過ぎてしまいそうなことなのですが、アベルの供え物は彼の所有する「群れのういごと肥えたもの」であったというのです。そう、それは彼にとって最もよきものであったというこ

とを意味します。それに対してカインが捧げた地の産物は彼が収穫したものの中で最もよきものではなかったということなのでしょう。よく形の悪い野菜やしなびれている野菜が安い値段でたたき売りされていますが、カインはよき物は自分の物とし、残り物のようなものを神様に捧げたのでしょう。

聖書は「主はアベルとその供え物とを顧みられた」、また「カインとその供え物とは顧みられなかった」と書いています。そう、主が顧みられたのは、その供え物だけではなく、それを捧げましたアベル自身であり、またカイン自身であったのです。そして言うまでもない、それは彼らの心なのです。

主にある皆さん、主なる神様はアベルの家畜を、カインの作物を作られ、育まれるお方です。ですから、神様にとりましてどんなものを捧げられても、それはそもそも神様のものなのです。しかも、それが肥えたものであっても、しなびれたものであっても、それ自体が神様に何か影響を与えることはありません。ただ大切なことは、その供えものをした彼らの心なのです。

先ほど言いましたように彼らが神様に捧げものをするようになったのは、親を見習ったことであり、それはある意味、習慣となっていたことなのでしょう。そんな年月が経ちますと、カインの心に思いがわいてきたのでしょう。なにも最良のものを捧げる必要もなかり。最良のものは自分のものとしておこうと。しかし、神の前にこのような隠れた思いをもつことは不可能で、神様は二人の心を見られ、ゆえにそこに「顧みられる者」と「顧みられない者」の区別が必然的に生まれたのです。

さて、このことに対してアベルはどうしたのでしょうか。しかしカインとその供え物とは顧みられなかったので、カインは大いに憤って、顔を伏せた(5)。彼はおおいに憤ったのです。そして顔を伏せたのです。顔を伏せたということは、神を仰ぐことをしなかったのです。すなわち、自分を顧みなかった神に対して大いなる憤りを持ち、神から顔をそらしたのです。非常に乱暴な言い方をすれば、彼は神を前にしてふてくされたのです。そのカインに対して神は親が子を諭すように尋ねます。6「なぜあなたは憤るのですか、なぜ顔を伏せるのですか。7正しい事をしているのでしたら、顔をあげたらよいでしょう。もし正しい事をしていないのでしたら、罪が門口に待ち伏せています。それはあなたを慕い求めますが、あなたはそれを治めなければなりません」(6、7)。

カインはこの主の言葉に答えていません。反省の言葉もありませんし、その後、自らを省みるということもなかったようです。ただ彼はこんな行動をとりまし

2016年10月9日(日)「未解決の問題が与える影響」 創世記4章1節-17節
た。

カインは弟アベルに言った、「さあ、野原へ行こう」。彼らが野にいたとき、カインは弟アベルに立ちかかって、これを殺した(8)。ここから明らかに分かることはカインはアベルを殺すために彼を野原に誘ったのです。神に憤り、顔を伏せたカインはその憤りを抑えきれずに、だからといって神に食ってかかることができないために、アベルを計画的に殺したのです。

このことに対して9主はカインに言われた、「弟アベルは、どこにいますか」。カインは答えた、「知りません。わたしが弟の番人でしょうか」。10主は言われた、「あなたは何をしたのです。あなたの弟の血の聲が土の中からわたしに叫んでいます。11今あなたはのろわれてこの土地を離れなければなりません。この土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたからです。12あなたが土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません。あなたは地上の放浪者となるでしょう」(創世記4章1節-12節)。

カインは「弟アベルはどこにいますか」と主に問われ、開き直りました。「知らねーよ。俺が弟の番人なのかい！」と。

主にある皆さん、この一連の出来事の問題はカインの弟アベルがうい子と肥えた羊を神に捧げたことなののでしょうか。いいえ、この出来事の問題はカインがどうでもいいようなものを神に捧げた、その彼の心にあったのです……。ということは、何かを思い起こしませんか。そうです、彼の両親、アダムとエバです。なぜ、彼らをここで思い起こすのでしょうか。なぜなら、カインがしたことはアダムとエバがしたことと同じなのです。すなわち、カインも自分の心に問題があるのに、それを全て弟アベルに転嫁したのです。彼の父母は言葉で責任を転嫁しましたが、カインの場合、その責任転嫁の代償は弟の命となりました。

先にお話ししましたように、もしかしたら母エバは夫アダムに向ける愛情をこのカインに注ぎ続けたのかもしれませんが。かわいい我が子、私達もそうでしたように、昔も今も子供は未熟で、色々と学ばなければならないことがあります。多くの過ちも犯しますでしょう。しかし、我が子があまりにも可愛く、自分の生きがいのようなカインに対して、彼が犯す過ちは咎められることなく、「ああ、それはあなたが悪いんじゃないんだよ、あなたじゃなくて、あの人、この事が悪いんだよ」とカインは言われ、育てられたのかもしれませんが。

その証拠にカインは自分が間違ったことをした、そのことを神様が明らかにし

2016年10月9日(日)「未解決の問題が与える影響」 創世記4章1節-17節
た時に、逆切れしてあたかも神を睨み付けるような態度を取ったのです。これは「あなたは間違っている」と言わせたことのない人の姿です。確かにアダムとエバの責任転嫁をカインは継承し、その結末は最悪のものとなったのです。皆さん、これが人類初代、そして二代目の人間の姿です。そして、私達も彼らももっていたものを継承している者なのです。

前回のものと今日のものも含めて、私はこれらのメッセージを準備しながら、厳粛な思いとなりました。このような人間の姿を直視することはとても辛いことです。しかし、このことに目を向けずにいたら、もしかしたらその問題がとんでもない悲劇を生み出すことになるかもしれないと思い、皆さんに話さなければならぬと思いました。問題の解決はまず、その原因を突き止めるところから始まるからです。

今日は紙面上、ここでこのメッセージを終わります。なんとも後味の悪い終わり方ですが、しかし、これでこの話は終わりではないということをお帰りください。来週はこのような人間の現実に対して聖書が語っている希望についてお話しします。これだけ赤裸々な話を聞いたのですから、来週のメッセージをミスすることがありませんように。来週のメッセージを聞かずして、このことを消化することはできませんから。願わくばこの一週間、私達それぞれが己が胸に手を置いて、もう一度、自らを省みてみましょう。天が照らしている光の前に自らの心を照らしてみましょう。そして、来週、またこの場でお会いしましょう。お祈りしましょう。